

“浸潤影”では、なぜいけないのか？

X線・CTなどの画像所見で浸潤影と記述されているのを幾度もみかける。このことをよく考え直してみよう。ひとこと浸潤影と記述された陰影は、どういう陰影だろうか？そう言われて、スケッチして画像を再現できるだろうか？

まずはそのまえに“浸潤影”という日本語の意味を考える。何かが肺に浸潤した影という意味である。炎症細胞でも腫瘍細胞でも浸潤しているものは何でもよい。ただ何かが浸潤した影だといっている。そうとなれば、浸潤したのではない陰影もあるはずだが、どんな陰影があるだろう？肺に起こる浸潤以外の成り立ちの異常な出来事の陰影である。

線維化影・石灰化影・出血影・置換影・壊死影などが浸潤影と並列するだろう。これらはいずれも、いわば画像の本態を言っている。この異常陰影は線維化の陰影である、とか、何か異常物質が正常組織に置き換わった陰影である、とか、何かが浸潤してきた陰影である、とか。でも、どうやってそんなことが判ったのだろう？如何なる根拠で線維化とわかったのだろう？浸潤と判断できるのだろう？考えてみれば、これらはすでに判断のレベルにあって画像の所見ではない。画像から推測した判断である。そのように画像を判断したなら、判断にいたった思考過程があるはずだが（何だかそんな感じがした、ではない）、その出発点は画像所見である。ちなみに、炎症影・腫瘍影・変性影・奇形影は聞いたことはないが、そのように表した陰影は、浸潤影や壊死影とは範疇を違えていて、さらに疾患そのものに近づいている。

画像所見とは画像を観察した所見である。その所見を記述しなければならない。一枚の胸部単純写真を手にとってみよう。ここに異常な陰影がある。それを観察して記述する。この写真を見ていない電話の相手に伝えて、相手が正しく画像をスケッチ出来たときに、所見を正しく記述できたことになる。異常陰影の所見は言語化されねばならない。しばしば耳にする、「こういう影」などはナンセンスである。「こういう」とは如何なる影かを言わねばならない。

画像所見はあくまで形状の記述である。形・部位・分布・数・大きさ・濃度・内部・辺縁の記述である。重さも匂いも硬さも画像では判らない。＊小著の総合プロブレム方式：新時代の臨床医のための合理的診療形式（2007プリメド社）のP144を参照していただきたい。

観察所見の記述を待って、ようやくこの異常陰影が何であるかを、あるレベルまで判断しえる。液体の貯留だとか、肺胞への何かの浸潤だとか、間質の腫脹だとか。液体貯留といっても、血液が否かは一枚の所見だけからではわからない。浸潤といっても液体か細

胞か、炎症細胞の膿瘍か腫瘍細胞の集塊か、判断しかねることも多い。まして、炎症細胞が好中球かリンパ球か判かりようもない。

むろん詳細な所見記述をもって、ただ陰影の性質だけでなく疾患まで確信して判断できることもある。それはあくまで、所見として質高く観察されて、その所見が疾患として他の疾患を否定してその疾患を肯定する高度の確からしさがある場合にである。空洞形成肺結核や気管支閉塞無気肺をともなう肺癌などである。

ここまで考えてくれば、“浸潤影”が所見でもなくて、求める判断に何も寄与していない事は見えてとれるだろう。患者の病気をただしく理解して合理的に診療をすすめるために、物事は広範に明晰に考えねばならない。明確な用語・論理的な筋道・事実と推測・所見と判断などを曖昧にしないことは、そのための必要要件である。

そのうち人工知能（AI）に画像診断を取って代わられることになるだろう。肺は複数の性質の影が複雑に一枚の写真に写っているから、deep learning といえど未だ難しそうである。腎臓・子宮などでは容易ではないだろうか。さはあれ、“浸潤影”を所見としていては人工知能（AI）に振り回されるだけになる。

付）興味深い資料をお見せしよう。

大戦前の時代の、某県の旧制中学入学試験問題である。受験者は小学6年の卒業生。封筒が一枚配られた。封を切ると中にヒノキとアスナロの葉が入っている。

問題；この二つの違いを書きなさい



小学卒業生にして違いを観察記述する能力があったのである。戦後日本は、旧制中学卒業生のリーダーシップと新制中学卒業生の誠実勤勉な労働によって復興したといって過言ではない。これに準じて当代の試験問題を作ってみる。

問題；二つの異常陰影の違いを述べよ

